

## インドでモリंगाを植えるーカマティプラの子供たちに夢を

竹内 陽子

モリंगाという植物の名前を何人の方がご存知でしょうか。3年前、私も初めて知ったこの植物が、今インドと日本の架け橋になろうとしています。

モリंगाとは、学名 *Moringa oleifera* 「モリंगा・オレイフェラ」、ケシ目ワサビノキ科で、北インドが原産の熱帯・亜熱帯地域の植物で、アフリカ、インド、フィリピン、マダガスカル、アラビア半島などの熱帯、亜熱帯地方を中心に自生しています。また、現在では日本でも、天草（熊本県）と沖縄で本格的な栽培に成功しています。

日本ではあまり知られていませんが、モリंगाは古くから300種もの薬効効果と、水と空気を浄化する驚きの植物として知られており、「奇跡の木」や「薬箱の木」とも呼ばれており、「アーユルヴェーダ」では、モリंगाを使ったヒーリング療法や食事療法、スピリチュアル療法が紹介されています。さらに栄養的にも、90種類以上の栄養素を含んでおり、その優れた栄養補助効果が珍重されてきました。葉、莖、花、実、種、根などすべての部位に高い栄養価を持っており

利用価値があることからマルチパーパスツリー（利用価値が高い万能木）と呼ばれています。

そのため、欧米諸国では1980年代半ばからモリंगाを活用できないかとの研究が進められていて、特に栄養面で着目され、アフリカの子供たちの栄養失調対策としての活動が進められています。2007年には国連が世界食糧計画の一環としてモリंगाの普及を推進しています。

モリंगाは、多くの国で愛されている樹木で、それぞれの国で様々な呼び名をもっています。インドでは「Moringa/モリंगा」と呼ばれている、とインターネットでは紹介されていました。現地では通じず、「Drumstick Tree/ドラムスティックツリー」（種子の莢が長いことからの呼び名です）という名前が一般的でした。マーケットでは、このドラムスティックが山積みされていました。ちなみに日本では、「わさびの木」と呼ばれています。

ドラムスティックは5cm程度のブツ切りにしてサンパール（酸っぱいスープ）やダール（豆カレー）に入っています。

表皮が堅いので、歯と歯でしごくような感じで中身だけを食べるのですが、中身は柔らかく滑らかで、料理のスープがしみ込んで大変美味しかったです。インドに行かれた方は、モリンガの若莢だと知らずに食べておられた方も多いはずですよ。

NPO法人インドで幼稚園を作る会では、マハーラシュトラ州のパトダ地区にあるガンダルバティ村に約6ヘクタールの土地を借り、モリンガの植林事業をスタートしました。NPO法人インドで幼稚園を作る会は、インドのムンバイ市カマティプラ地区（インド最大の売春街）に幼稚園を作り、売春街の子どもたちに基礎教育を与え、無知と貧困がもたらす負の連鎖を断ち切るために、現地のNGO「Apene Aap Woman's Collective」と連携して幼稚園の運営と支援を行うために設立された組織です。理事の大久保美喜子は、この活動をはじめから約10年になりますが、当初から幼稚園に対する資金援助を続けてきました。原資は、会員の会費、寄付等で、現地スタッフの給与、教材費、給食等の一部に使われています。さらに、3年前には卒園児への奨学金制度を導入し、子どもたちへの支援を拡充してきました。

当NPOでは売春婦を親に持つ子どもたちが、親から受け継がれる貧困の連鎖を断ち切るためには、教育が最も大切と

の信念で活動してきました。そして約10年間の活動を通して考えさせられたことは、子どもたちの状況をさらに改善するためには、母親を売春以外の健全な仕事に就かせ、経済的にも精神的にも自立させることが必要ではないかということでした。そのために考えたのがモリンガの植林事業でした。従来の支援は今後とも継続しながら、さらに新しい事業展開が必要との考えから、その事業をスタートいたしました。今年3月の訪印時に農場を視察、村人とも親交し、灌漑設備の整った約6ヘクタールの土地（農場）を借りる契約を4月に結び、援助金を送りました。そして5月から準備を始め、7月に種植えを完了しました。

モリンガ事業の当面の目標は、モリンガ種子の採種です。モリンガの種子は、気候の関係で日本では採れません。そのため育種に適しているインドで採種し、日本に輸出します。インドでは育種に必要な一部の莢を残し、それ以外の葉や若莢は、幼稚園の子どもたちや村人のために活用します。

モリンガの栄養素が最も多く含まれるのは葉です。現地の幼稚園の子どもたちはミネラル不足のため補助食品を飲んでいますが、モリンガはミネラル、アミノ酸、ビタミンをハイバランスで含んでいますので、給食で使ったり、お茶のよう

にただ飲むだけで、ミネラル不足の解消に役立ちます。村で乾燥させたモリンガのドライリーフやそれから作るパウダー、育種に余分な若莢を幼稚園の給食で使ったり、家庭でも使ってもらうように無償供与することで、子どもたちやその家族の栄養失調、栄養不足の改善に役立てたいと思っています。

また、幼稚園でモリンガを配布することは、通園・学習のモチベーションを上げ、幼稚園に通う子どもたちを安定的に増やすことへつながります。また、林間学校や植林学習など子どもたちのフィールド学習の場を提供し、将来はモリンガ農場や工場などで雇用の場を提供し、親の極貧・無知の負の連鎖を断ち切ることへつながれば、と考えています。

モリンガ農場があるバトダ地区のガンダルバティ村の農民は、ほとんどが自給自足の生活です。モリンガ事業が軌道に乗れば、モリンガの農場や工場の労働者、事務員として雇用の機会を増加させ、経済的に安定した生活基盤を得ることで、経済面の自立を図り、また、地域グループの管理・運営を通して生きていく知恵を育て識字率の向上、金銭面の管理等、精神面の自立に貢献できます。

すでにこれまでの事業活動で村人の意識は向上し、余剰のモリンガの若莢を市場で販売して収入を得ることや、その収入を収穫量を増やす対策に充当することを考え始めています。

また栄養面でも、村の子どもたちとその家族、ひいては地域社会全体の栄養改善にも効果が出てきています。

私たちの活動が、インドの幼稚園の子どもたちと村の経済の支援につながり、インドでのモリンガ事業がインドと日本の架け橋となることを願ってやみません。

(天草モリンガ農場 榑彰農園代表 NPOインドで幼稚園を作る 会員)